

◇ 1月の天文暦 ◇

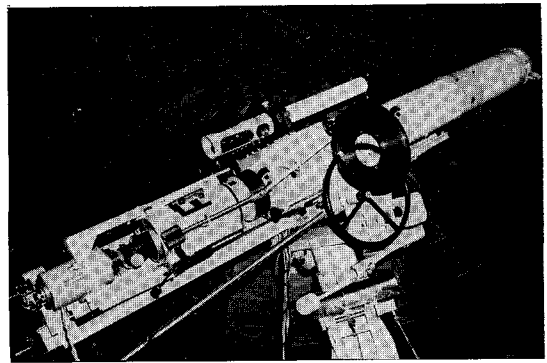
日時	記	事
4 14	上弦	
5 4	地球 近日点通過	
6 9	小寒 (太陽黄経 285°)	
8 14	水星 留	
11 22	望	
16 20	月 最遠	
18 17	土星 留	
22	天王星 留	
19 13	水星 西方最大離角	
20 3	下弦	
21 1	金星 西方最大離角	
2	大寒 (太陽黄経 300°)	
27 8	朔	
28 19	月 最近	

12 cm コロナグラフ (乗鞍)

乗鞍コロナ観測所が建設された翌年の昭和25年に、それまで各地を巡業して試験観測を行ない、やっと安住の地を得た手作りのコロナグラフに代って据付けられた、このコロナグラフも当年で20才になる。世界で最も小型のクラスに属するこのコロナグラフは戦後に東京天文台が製作した望遠鏡の第1号機でもある。

20年の歴史のなかで、この小さな望遠鏡には観測目標が増加するごとに改造に改造が加えられ、今や当初の面影を止めぬまでに各種の装置が満載されていて、文字通りすべての観測を一身に荷っている。

コロナの常時観測は当初の電気事情や水不足を考慮して眼視測光によって始められ、現在もそのまま続けられているが、この他に干渉フィルターによる紅炎の撮影、複屈折干渉フィルターによるコロナ単色像の撮影、高感度の偏光計を組込んだKコロナメーターによるKコロナの測定、小型分光器によるコロナや紅炎のスペクトル撮影などが目的に応じた組み合わせでおこなわれていて、電気や水は今や観測には不可欠のものとなっている。1965年



太陽に接近した池谷・関隼星の写真はこの種の写真では世界唯一のものであり、読者の記憶にも残っていることと思う。

冬期には防寒具、風防眼鏡、ヘルメットの完全武装でピッケルを揮うドーム上での氷落し作業に始まる観測も、夏期には暑さ知らずの天国で、観測者自身でさえ冬のきびしかったことが実感として想像できないほどである。しかし夏には反面、登山客がバスや自家用車で下界の公害を持込んでくる。接眼鏡の視野に乱舞する無数のゴミや小さな羽虫は実に美しく輝いているが、撮影したフィルム上に不要な線条が写ったり、Kコロナメーターの記録計の針が振動を始めると無性に腹が立ってくる。このようなゴミの害は登山客には想像もできないことであろう。コロナ観測はこのように散乱光との戦いでもある。ドームの中やコロナグラフは常に清掃され、最も重要な対物レンズは観測の始めに細心の注意で磨かれる。コロナ観測室は他の観測室に比べ最も清潔な場所であろう。

所員の若さで乗切った建設期の20年が終り、今や生活環境もほぼ整ったコロナ観測所には、自動プログラミング観測装置を含む焦点距離7mの長焦点分光器やエッシエル分光器を備えた有効口径25cmのクーデ型コロナグラフの製作が来年の据付けを目標に着々と進められている。(清水一郎)

